

子ども・子育て新システム検討会議作業グループ こども指針(仮称)ワーキングチーム(第5回)	資 料 3-2
平成23年5月26日	

参 考 資 料

(「小学校との連携・接続」関係)

平成23年5月26日

第5回 こども指針(仮称)ワーキングチーム資料

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議

1. 趣旨

発達と学びの連続性を踏まえた幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方を検討するため、外部の有識者等の協力を得て、調査研究を行う。

2. 調査研究事項

- ①幼稚園・保育所・認定こども園と小学校における子どもの発達と学びの連続性について
- ②子どもの発達と学びの連続性を確保するための教育方法について
- ③その他

3. 開催実績

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 第1回(H22. 3.19) | 現状説明とフリートーキング |
| 第2回(H22. 4.13) | 委員からのプレゼンテーション |
| 第3回(H22. 4.23) | |
| 第4回(H22. 5. 6) | |
| 第5回(H22. 5.11) | |
| 第6回(H22. 5.28) | |
| 第7回(H22. 6.30) | 論点別協議 |
| 第8回(H22. 7.16) | |
| WG(H22.8.17~9.29) | ワーキンググループで報告書のとりまとめに向けて検討 |
| 第9回(H22. 10.6) | 報告書・座長試案について協議 |
| 第10回(H22.10.15) | 報告書案について協議 |

4. 報告書のとりまとめ

平成22年11月11日

4. 委員名簿 (計21名)

赤石	元子	東京学芸大学附属幼稚園副園長
○秋田	喜代美※	東京大学大学院教授
岩立	京子	東京学芸大学教授
榎沢	良彦	淑徳大学教授
太田	早津美※	名古屋市子ども青少年局子育て家庭部 保育事業主幹
岡上	直子※	練馬区立光が丘さくら幼稚園長
押谷	由夫※	昭和女子大学教授
神長	美津子※	東京成徳大学教授
神村	大輔	上越教育大学附属小学校副校長
岸本	佳子	神戸大学附属幼稚園副園長
木下	光二※	鳴門教育大学大学院准教授
河野	秀樹	さいたま市教育委員会主任指導主事
嶋田	あけみ	大田区立南馬込第二保育園長
角田	元良	聖徳大学大学院教授
奈須	正裕※	上智大学教授
北條	泰雅※	みなと幼稚園長
向山	行雄	中央区立泰明小学校長・幼稚園長
◎無藤	隆※	白梅学園大学教授
山本	勝義	社会福祉法人 I C A 理事長、市場保育園長
湯川	嘉津美	上智大学教授
若盛	正城	認定こども園こどものもり園長

◎…座長、○…副座長、※ワーキンググループメンバー

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)のポイント

<幼小接続の課題> (文部科学省調査より)

- ほとんどの地方公共団体で幼小接続の重要性を認識(都道府県100%、市町村99%)。
- その一方、幼小接続の取組は十分実施されているとはいえない状況(都道府県77%、市町村80%が未実施)。
- その理由・「接続関係を具体的にすることが難しい」(52%)、「幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない」(34%)、「接続した教育課程の編成に積極的ではない」(23%)

(報告のポイント)

①幼児期の教育と小学校教育の関係を「連続性・一貫性」で捉える考え方を示す

- 教育基本法や学校教育法において、幼小の教育の目的・目標(知・徳・体)は連続性・一貫性をもって構成。
- 幼小接続を体系的に理解するため、幼小接続の構造を「3段階構造」(教育の目的・目標⇒教育課程⇒教育活動)で捉える。
- 幼小の教育の目標を「学びの基礎力の育成」という一つのつながりとして捉える。
- 幼児期の教育と小学校教育では、互いの教育を理解し、見通すことが必要。(その際、幼児期の教育と小学校教育は、それぞれ発達の違いを踏まえて教育を充実させることが重要であり、一方が他方に合わせるものではないことに留意。)

②幼児期と児童期の教育活動をつなぎで捉える工夫を示す

- 幼小を通した学びの基礎力の育成を図るため、
 - ・ 幼児期の終わりから児童期(低学年)にかけては「三つの自立」(学びの自立、生活上の自立、精神的な自立)を育成。
 - ・ 上記に加え、児童期においては、「学力の三つの要素」(「基礎的な知識・技能」、「課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」)を育成。
- 学びの芽生えの時期(幼児期)、自覚的な学びの時期(児童期)という発達の段階の違いからくる、遊びの中での学びと各教科等の授業を通した学習という違いがあるものの、「人とのかかわり」や「ものとのかかわり」という直接的・具体的な対象とのかかわりで幼児期と児童期の教育活動のつながりを見通して円滑な移行を図ることが必要。

「人とのかかわり」における留意点

<幼児期の終わり>

- 幼児の興味・関心や生活、協同性の育ち等の状況を踏まえて教職員が方向付けた課題を自分のこととして受け止め、相談したり互いの考えに折り合いをつけたりしながら、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に進めることが必要。

「ものとのかかわり」における留意点

<幼児期の終わり>

- 幼児の興味・関心や生活等の状況を踏まえて教職員が方向付けた課題について、発達の個人差に十分配慮しつつ、これまでの生活や体験の中で感得した法則性、言葉や文字、数量的な関係などを組み合わせ課題を解決したり、場面に応じて適切に使ったりすることについて、クラスやグループみんなで経験できる活動を計画的に進めることが必要。

- 小学校入学時に幼児期の教育との接続を意識したスタートカリキュラムの編成の留意点を示す。
(幼稚園・保育所・認定こども園との連携協力(子どもの実態や指導の在り方等について理解を深める等)、授業時間や学習空間などの環境構成等の工夫(15分程度のモジュールによる時間割の構成等)など)
- 幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を「接続期」というつながりとして捉える考え方の普及を図る。
(幼児期の年長から児童期(低学年)の期間における子どもの発達や学びの連続性を踏まえて接続期を捉えることが必要。なお、接続期の実際の始期・終期は各学校・施設について適切な期間を設定。)

③幼小接続の取組を進めるための方策(連携・接続の体制づくり等)を示す

- 幼小接続の取組を進めるための方策として、幼小接続のための連携・接続の体制づくり、教職員の資質向上(研修体制の確立)、家庭や地域社会との連携・協力についてのポイントを示す。

幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の在り方について(報告)(概要)

子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児期の教育(幼稚園、保育所、認定こども園における教育)と児童期の教育(小学校における教育)の円滑な接続の在り方について検討し、以下のとおり、報告をとりまとめた。

1. 幼小接続の現状と課題

(幼小接続の重要性)

- 子どもの発達や学びの連続性を保障するため、幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われることが重要。(本報告書における「幼小接続」については、幼稚園と小学校という学校同士の接続はもとより、保育所、認定こども園といった幼児期の教育を担う施設で行われる教育と小学校教育との接続も考慮した上で用いている。)

(幼小接続の現状と課題)

- 文部科学省の調査結果からは、幼児と児童の交流活動や幼小の教職員の意見交換等の取組はある程度実施されているとともに、ほとんどの地方公共団体で幼小接続の重要性が認識されている。
- その一方、地方公共団体や各学校・施設(幼稚園・保育所・認定こども園と小学校)の幼小接続のための取組は十分実施されているとはいえない状況。
- その理由としては、「接続関係を具体的にすることが難しい」、「幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない」、「接続した教育課程の編成に積極的ではない」があげられる。

(本報告書のとりまとめの方向性)

- 幼小接続の取組を進めるには、まず何よりも子どもの発達や学びの連続性を踏まえた、幼児期から児童期にかけての教育のつながりを理解するための道筋を明らかにすることが必要。(本報告書における「教育課程」には、保育所や認定こども園で編成・実施される「保育課程」を含むものとする。)

2. 幼小接続の体系

(幼小接続の体系的理解)

- 幼小接続を体系的に理解するためには、幼小の教育を、「教育の目的・目標」→「教育課程」→「教育活動」で展開する「3段構造」で捉えることが必要。

(教育の目的・目標)

- 教育基本法や学校教育法において、幼小の教育の目的・目標(知・徳・体)は連続性・一貫性をもって構成されている。
- 幼児期から児童期の教育は生涯にわたる学びの基礎となる極めて重要なものであることから、幼児期の教育と児童期の教育の目標を「学びの基礎力の育成」という一つのつながりとして捉えることが必要。

(教育課程)

- 幼児期と児童期における教育課程の構成原理やそれに伴う指導方法等には、発達の段階に配慮した違いが存在するものの、こうした違いの理解・実践は、あくまで両者の目的・目標が連続性・一貫性をもって構成されているとの前提に立って行われなければならない。

(教育活動)

- 幼児期から児童期にかけての時期は、学びの芽生えの時期(幼児期)と自覚的な学びの時期(児童期)という発達の段階の違いからくる、遊びの中での学びと各教科等の授業を通した学習という違いがあるものの、「人とのかかわり」や「ものとのかかわり」という直接的・具体的な対象とのかかわりで幼児期と児童期の教育活動のつながりを見通して、幼児期から児童期の教育への円滑な移行を図ることが必要。

3. 幼小接続における教育課程編成・指導計画作成上の留意点

(教育課程編成上の留意点)

- 学びの基礎力の育成を図るため、幼児期(特に幼児期の終わり)から児童期(低学年)にかけては、「三つの自立」(学びの自立、生活上の自立、精神的な自立)を養うことが必要。
- 児童期以降の教育においては、生涯にわたる学習基盤の形成、すなわち「学力の三つの要素」(「基礎的な知識・技能」、「課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力等」、「主体的に取り組む態度」)の育成に特に意を用いなければならない。
- 幼児期の終わりにおいては、学びの基礎力の育成を図るため、この時期にふさわしい「三つの自立」を養うことが求められる。児童期(低学年)においては、学びの基礎力の育成を図るため、この時期にふさわしい「三つの自立」を養うことを含め、教育活動全体を通じて「学力の三つの要素」を培うことが求められる。
- 幼児期から児童期にかけての教育においては、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない、小学校1年生などの教室において、学習に集中できない、教員の話が聞けずに授業が成立しない(いわゆる「小1プロブレム」)などの課題を抱えている学校が見られる。これらの課題は、幼児期の教育の責のみに帰することも、児童期の教育の責のみに帰することもできず、両者が課題を共有し、共に手を携えて解決のための取組を進めていかなければならない。

(幼児期と児童期が共通して抱える課題の解決のための具体的な手立てについては、「指導計画作成上の留意点」において、より具体的に述べており、各学校・施設においては、これらを手掛かりに、創意工夫し、それぞれの実情に応じた取組を進めていくことが必要。)

(指導計画作成上の留意点)

①「人とのかかわり」における留意点

<幼児期の終わり>

- 社会の構成員としての自覚をもって活動を始める重要な時期であることに鑑み、幼児の興味・関心や生活、協同性の育ち等の状況を踏まえて教職員が方向付けた課題を自分のこととして受け止め、相談したり互いの考えに折り合いをつけたりしながら、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に進めることが必要。

<児童期(低学年)>

- 幼児期における「人とのかかわり」の指導の状況や実際の子どもの発達や学びの状況を十分把握しつつ、学校教育活動全体を通じ、与えられた課題について友達と助け合いながら、自分が果たすべき役割(学習や仕事)をしっかりと果たすといった集団規範性の形成を図る活動を計画的に進めることが必要。その際、幼児期の教育の方法を取り入れていくことも考えられる。

②「ものとのかかわり」における留意点

<幼児期の終わり>

- 「思考力の芽生え」、「言葉の正しい使い方」、「豊かな感性と表現力の芽生え」(学校教育法)について、今まで学んできたことを総合化し、小学校生活に向けて学びを高めていくため、幼児の興味・関心や生活等の状況を踏まえて教職員が方向付けた課題について、発達個人差に十分配慮しつつ、これまでの生活や体験の中で感得した法則性、言葉や文字、数量的な関係などを組み合わせて課題を解決したり、場面に応じて適切に使ったりすることについて、クラスやグループみんなで経験できる活動を計画的に進めることが必要。

＜児童期(低学年)＞

- 幼児期における「ものとのかわり」の指導の状況や実際の子どもの発達や学びの状況を十分把握しつつ、各教科等の指導を通じ、日常生活に必要な基礎的な国語の能力、生活に必要な数量的な関係の正しい理解や基礎的な処理能力、生活にかかわる自然事象についての実感的な理解と基礎的な能力、音や音楽のよさや面白さを感じ取りながら表現・鑑賞する能力、身近な自然物や人工の材料の形や色などから発想や構想の能力などの育成を図るための活動を計画的に進めることが必要。その際、幼児期の教育の方法を取り入れていくことも考えられる。

③人やものとのかわりと言葉や表現の関係

- 人やものとのかわりを支えるために重要な役割を担うのが言葉や表現である。言葉や表現は学びの基礎力を育む上で極めて重要であり、学びの基礎力が育まれる中で言葉や表現も発達していく。こうした言葉や表現の重要性を踏まえ、言葉や表現を通じて他の子どもや教職員・保護者とのやりとりを行うことで気付きや思考を深めようとする活動が展開されるよう、留意することが必要。

④スタートカリキュラムの編成における留意点

- 小学校入学時に、幼児期の教育との接続を意識したスタートカリキュラムが生活科などを中心に各小学校において進められており、今後ともその取組を進めていくことが必要。スタートカリキュラムを編成する上での主な留意点は次のとおり。
 - ・幼稚園、保育所、認定こども園と連携協力すること
 - ・個々の児童に対応した取組であること
 - ・学校全体での取組とすること
 - ・保護者への適切な説明を行うこと
 - ・授業時間や学習空間などの環境構成、人間関係づくりなどについて工夫すること

⇒各学校・施設において幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の姿をイメージする

- 各幼稚園等の取組の参考となるよう、幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿を参考例として示している。

4. 幼小接続の取組を進めるための方策

(連携・接続の体制づくり)

- 幼小接続の取組は、教職員の交流などの人的な連携から始まり、次第に両者が抱える教育上の課題を共有し、やがて幼児期から児童期への教育のつながりを確保する教育課程の編成・実施へと発展していく。その際、都道府県・市町村には、教育委員会を中心として関係部局が連携し、各学校・施設へ積極的な支援を行うなどのリーダーシップが求められる。
- 幼小接続のための連携・接続の関係を明らかにして各学校・施設が共有し、後戻りのない取組を進めていくことが必要。その際、都道府県や市町村の教育委員会等があらかじめ連携・接続に関する基本方針や支援方策を策定し、各学校・施設はそれらを踏まえて連携や接続の取組を進めることが望ましい。(連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安は、次のとおり。)
 - ・ステップ0 連携の予定・計画がまだ無い。
 - ・ステップ1 連携・実施に着手したいが、まだ検討中である。
 - ・ステップ2 年数回の授業、行事、研究会などがあるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
 - ・ステップ3 授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
 - ・ステップ4 接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

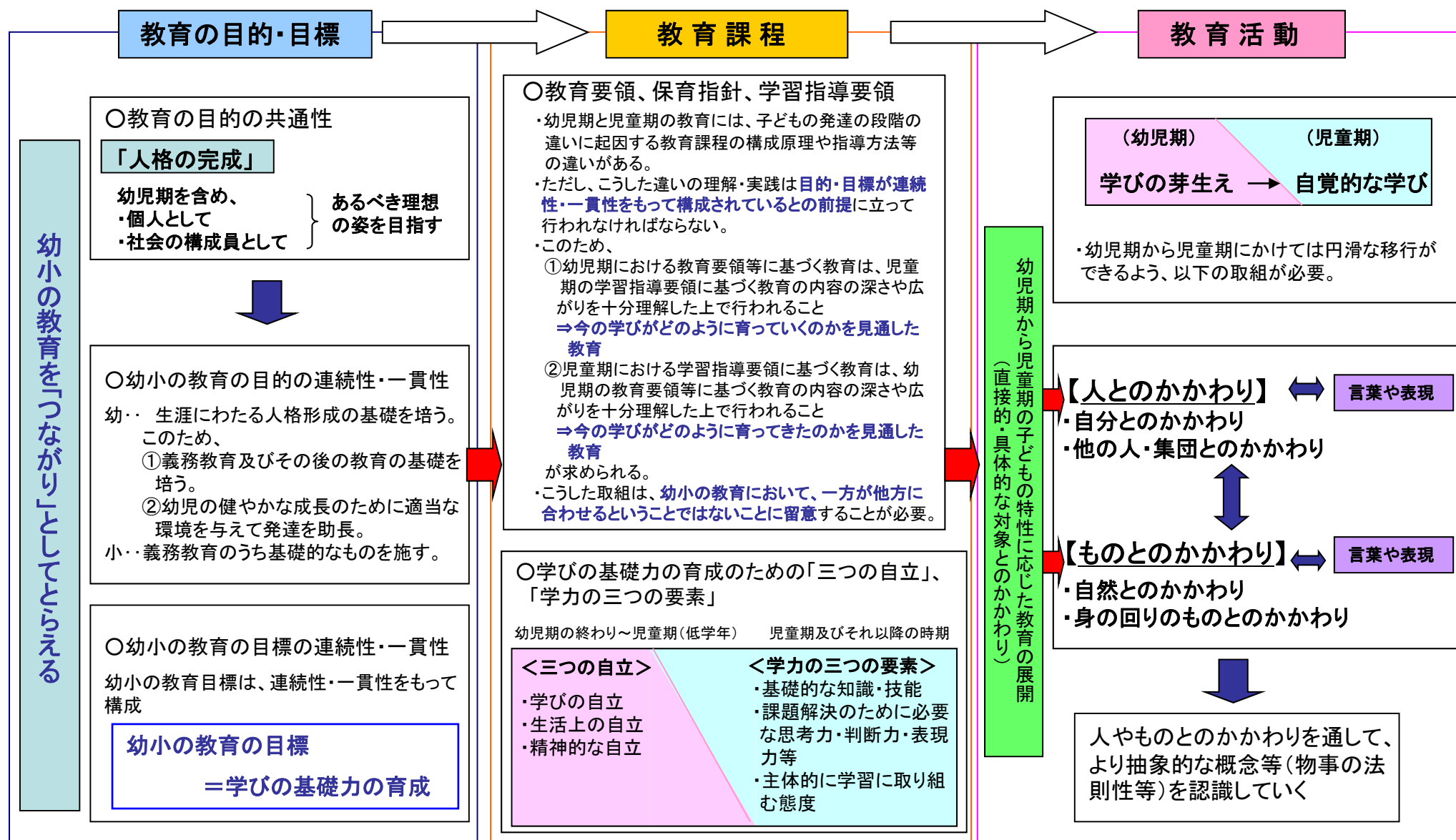
(幼児期と児童期をつながりとして捉える工夫(接続期))

- 幼小接続を積極的に進めるためには、幼児期と児童期をつながりとして捉える工夫が必要であり、幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を「接続期」というつながりとして捉える考え方を普及することが必要。
- 接続期は、幼児期の教育から児童期の教育への単なる準備期間や馴れの期間と捉えるべきではなく、幼児期全体と児童期全体を通じた子どもの発達や学びの連続性を意識する中で、幼児期の年長から児童期(低学年)の期間における子どもの発達や学びの連続性を踏まえて捉えることが必要。
- 接続期の始期・終期については、各学校・施設において、適切な期間を設定して幼小接続の実践を工夫していくことが必要。また、国においては、研究開発学校等において接続期に関する研究を支援するなどの取組が求められる。

(家庭や地域社会との連携・協力)

- 家庭や地域社会との連携・協力が重要であり、共に子どもを育てていくという視点に立って、家庭や地域社会との連携を深め、子どもの生活の充実と活性化を図ることが大切である。このため、幼小接続に関する保護者の理解を得て小学校就学の不安解消のための取組を行うことが必要。また、障害のある子どもなど特別な支援が必要な子どもに対する幼小接続に当たっては、家庭や地域の医療、福祉等の関係機関と連携することが必要。家庭や地域の人々、関係機関の理解の広がり、各学校・施設の教育への連携・協力の意識を高めることが期待できる。

幼児期から児童期にかけての教育の構造等

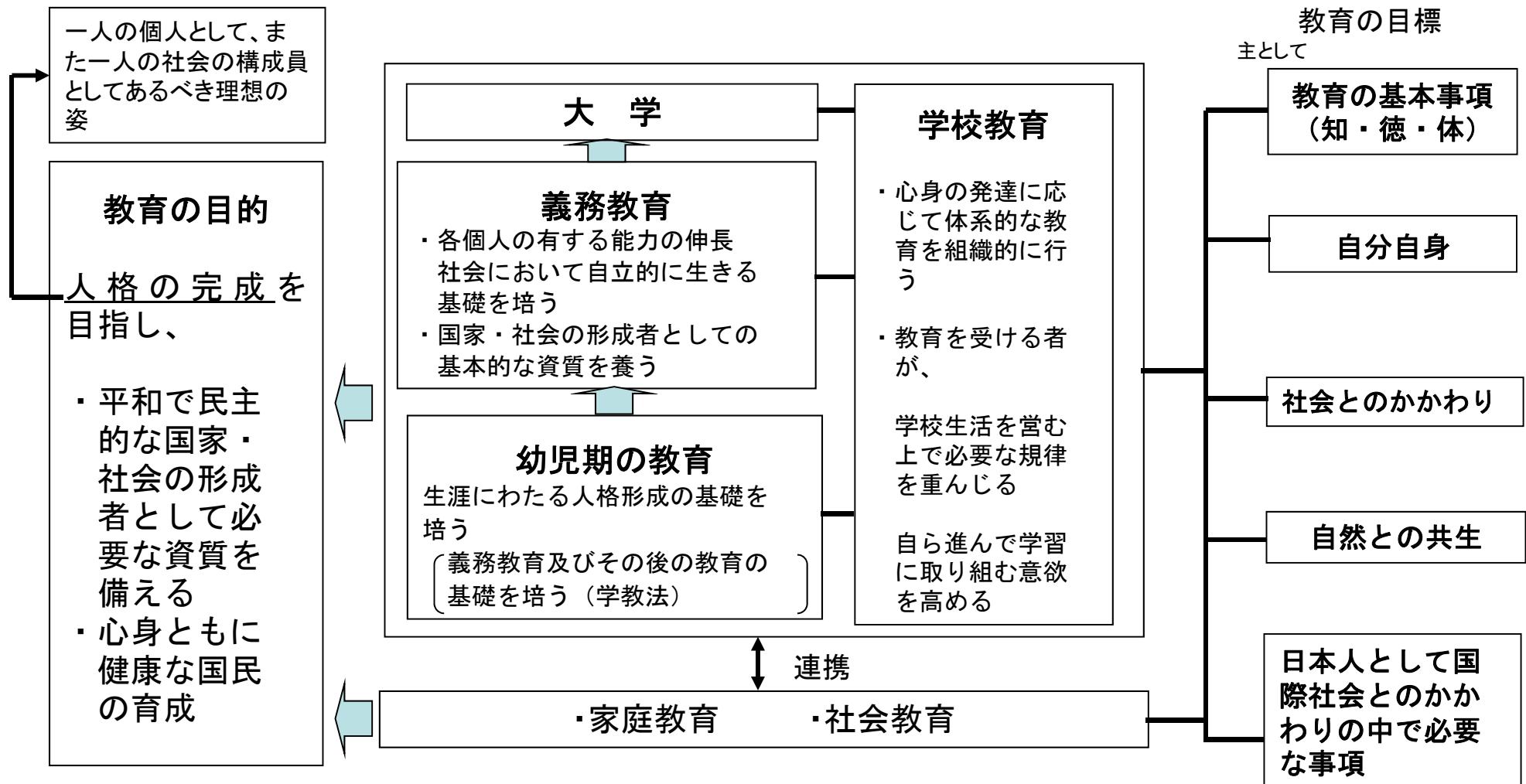


(※1)・「学びの自立」・自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる活動を自ら進んで行うとともに、人の話をよく聞いて、それを参考にして自分の考えを深め、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現すること。
 ・「生活上の自立」・生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわり、自らよりよい生活を創り出していくこと。
 ・「精神的な自立」・自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方や夢や希望をもち、前向きに生活していくこと。

(※2)「教育の目的・目標」→「教育課程」→「教育活動」という流れに加え、実際には「教育活動」から「教育課程」を見直すといった流れもある。

教育基本法の体系

- ・ 教育の中で必要となる事項は主として、教育の基本事項（知・徳・体）、自分自身、社会とのかかわり、自然との共生、日本人として国際社会とのかかわりの中で必要な事項からなる。
- ・ 学校は、幼児期から大学までこれらの教育を体系的かつ組織的に行うもの。



※「幼児期の教育」・・・当該教育のうち、幼稚園担当部分（保育所、認定こども園の教育機能部分を含む）として使用。それ以外の教育は家庭教育、社会教育を含む。

幼稚園・小学校教育の連続性・一貫性と学びの基礎力の育成について

幼稚園教育(学教法第23条)

小学校教育(義務教育)の目標(学教法第21条)

学 び の 基 礎 力 の 育 成

<知>

- ③ 身近な社会生活、生命及び自然に対する正しい理解
- ③ 身近な社会生活、生命及び自然に対する思考力の芽生え
- ④ 言葉の正しい使い方
- ⑤ 豊かな感性と表現力の芽生え

<徳>

- ② 家族や身近な人への信頼感
- ② 自律及び協同の精神
- ② 規範意識の芽生え
- ② 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度
- ③ 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味、態度
- ④ 相手の話を理解しようとする態度

<体>

- ① 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣
- ① 身体諸機能の調和的発達

<知>

- ① 公正な判断力
- ③ 我が国と郷土の現状と歴史についての正しい理解
- ③ 外国の文化の理解
- ④ 家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業その他の事項についての基礎的な理解
- ④ 家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業その他の事項についての基礎的な技能
- ⑤ 生活に必要な国語の正しい理解
- ⑤ 生活に必要な国語を正しく使用する基礎的な能力
- ⑥ 生活に必要な数量的な関係の正しい理解
- ⑥ 生活に必要な数量的な関係を正しく処理する基礎的な能力
- ⑦ 生活にかかわる自然現象についての科学的な理解
- ⑦ 生活にかかわる自然現象について、科学的に処理する基礎的な能力
- ⑨ 音楽、美術、文芸その他の芸術についての基礎的な理解
- ⑨ 音楽、美術、文芸その他の芸術についての基礎的な技能
- ⑩ 将来の進路を選択する能力

<徳>

- ① 自主、自律及び協同の精神
- ① 規範意識
- ① 公共の精神
- ① 主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度
- ② 生命及び自然を尊重する精神
- ② 環境の保全に寄与する態度
- ③ 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度
- ③ 他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度
- ⑩ 勤労を重んずる態度

<体>

- ⑧ 健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣
- ⑧ 運動を通じた体力の向上
- ⑧ 心身の調和的発達